①市民

社会的価値判断力や意思決定力を育てる市民の学習

（二年次）

1　研究全体のテーマと市民テーマの関連

「研究の概要」にもあるとおり，現代社会は，価値観の多様さが原因で容易に解決できない問題が増えてきている。だからこそ，様々な社会的事象の葛藤場面を感じる問題に出あい，そこで，他者の異質性を尊重し責任ある行動をとり，社会の構成員の自覚をもつことが求められるのである。

市民部会では，このような時代を生き，未来の社会を創造する子どもに培いたい中心的な「リテラシー」として，**社会的価値判断力，意思決定力，「社会を見る３つの目」**の３つを掲げた。

2　市民で育む「公共性」

(1)　社会的価値判断をする

社会的価値判断力とは，社会的な事象に対して「良い・悪い」，「するべきである，するべきでない」，と価値づけたり，評価したりする判断のことである。例えば，「水道水よりミネラルウォーターを飲む人が増え続けている。良いのか」という問題に対して「良い」，「仕方ない」，「ダメ」と判断は分かれる。子どもたちは，自他の価値観の違いを発見する。それらの価値判断を，相互に吟味することで，価値判断力が磨かれると考える。ただし，この時点では，子どもたちは自分を主張し，お互いを「排除」しあうことが多い。具体策が見えないことも関係あるのだと考える。

(2)　意思決定する場面で

意思決定力とは，価値判断にもとづいて目的実現のために，「何をするべきか」，「どのような解決策がより望ましいか」と最も合理的な策を選択・決定することである。上の例では，より多くの都民が水道水を利用するには，「更に美味しく」「安全性を高める」などの策から選択・決定することになる。つまり，社会の諸問題について，事実にもとづいて自分なりに考え，異なる考え方が存在することを前提に，他者から賞賛や反論を得ることを通して，自分の考えを決定していくことが，市民で育てる「公共性」といえるだろう。なお，最終的な意思決定力は価値判断をよりどころとし，その上，子どもの具体的な思考力や創造力が内包された重要な「公共性」のあらわれと考える。

(3)　「社会を見る３つの目」－『児童教育』13号　鳴門教育大学教授・小西正雄先生の講演から－

このリテラシーは民主主義社会の認識の仕方として根幹にあたる部分である。

①社会には，一個人の工夫や努力では，できることと，できないことがある。
②個人の利害と社会全体の利害は，必ずしも一致しない。
③だから，世の中には，広い視野から社会を調整する仕組みが必要であるとともに，一人一人の工夫や努力が必要である。

広い視野から社会を調整する仕組みが必要であることをとらえさせるためには，ある意思決定の実行に伴う，少数の人々の不利益を最小限にする大切さを考えるような，葛藤のある社会事象に出あわせる必要がある。そこで，話を聞（聴）く，考えを分かりやすく伝えるなどの学習を積み上げて，他者の異質性を受け止めて主張できる人に育てたい。ただし，葛藤がない場合や，少数派の不利益が問題にならない場合もある。

(4)　社会的価値判断力，意思決定力の高まりをどのように評価するのか

昨年度の公開研究会でいただいた課題で特に検討したことは，社会的価値判断力や意思決定力の高まりをどのように評価するのかという問題である。まだ，仮説だが，「価値判断や意思決定の学習過程」それぞれの段階に，「評価する観点」があると考えてみた。次頁の図をご覧いただきたい。

社会的価値判断や意思決定の学習過程	社会的価値判断力や意思決定力の高まりを評価する観点
(1) 価値判断や意思決定するべき課題がありそれを問題としてとらえる。	○どんなことに対して，自分と対象（問題）との関わりに気づくか ○どのような問題に対して，自分が判断しようとしているのか気づくか。
(2) 自分の予想的な考えをもち，第一次的な社会的価値判断をする。	○どんなことをもとに，直観的にでもよいから，自分なりに考えを言おうとするか。 ・既有経験から　・既習事項から　・大人の受け売り ○自分の発言に対する責任をどのように感じるか。 ・自分の考えにこだわろうとする（自己主張を楽しむ性向から） ・友だちの意見に合わせようとする（評価懸念から） ○考え方の違いで合意できるところ，できないところの存在に気づくか。 （ここでは，他者の視点を受け入れられなくても，まだ良い。）
(3) 自分（たち）の予想的な社会的な価値判断を裏付ける情報を収集する	○根拠となる事実を探すために，どのような方法で情報を収集するか。 ・人に聞く傾向がある　・本から　・ネットから ○情報を選択し，情報の信憑性を評価しようとするか。 ・他の情報と比較しようとするか，関係づけようとするか。 ○推論しようとするか ・既習（有）経験から，新しい事象について考えようとする。 ・事象の共通点や傾向，因果関係を考えようとする。
(4) 収集した情報を説得力のあるものに加工する。	○分析しているか。 ・論点にあわせて，関係する事実を選んでいる ○構成（主張を筋道立てて説明する）しているか ・結論を言っている　・結論の根拠を示している。
(5) 自分(たち)の考えを発信し，修正を加えたり，反論を得たりして，二次的な判断をする。	○条件や優先順位などの観点を加味して考えているか。 ○他者の視点（友だちか，社会の大人か）をもとうとしているか。 ○自分と違う意見の良さにも気がついているか ○自分と違う意見を聞き入れて，心を寄せて決定できているか

社会的価値判断力や意思決定力を評価する際には，上の観点に従いながら，前回よりもどの観点がどのように向上したのか，個人内評価を繰り返したらどうだろうか。単元の始まりと最終段階で，前単元と本単元で，どのように変化したのかを考察してみたい。これについては，実践事例をご覧いただきたい。今後は，パフォーマンス・アセスメントのような評価方法の開発が必要になろう。

3　授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿　5年生「情報社会に生きる」～携帯電話の優先席付近での使用問題を考える～

(1)　「情報社会に生きる」から「社会を見る３つの目」を育てる

子どもたちは，通信ネットワークシステムの利便性については，自分や保護者の使用状況から感じていると思われるが，その背後に潜む問題点や危険性についてはまだまだわかっていないところがある。本単元では，通信ネットワークシステムの様々な問題の中から，携帯電話の優先席付近の使用問題について考える活動を通して，「社会を見る３つの目」を育てたいと考えた。交通機関を使って登下校する子どもたちが多い本校の実情から，その問題は日常の中でよく見かける光景だからである。この問題を解決するためには，一人ひとりの努力はもちろんのこと，鉄道会社や携帯電話会社などの工夫や努力，さらには条例化なども大変重要である。それを，それぞれの立場から提案しながら，どのようなことができるのか現状を調べながら考え，更に提案する活動を通して，情報の受け手としての活用，発信に対して責任をもつことの大切さも考えさせたいと願った。

※(2)実際の学習は次頁

(3)　社会的価値判断力・意思決定力を高めるための手だて

上記表は，子どもたちの社会的価値判断力の変容を追ったものである。子どもたちの社会的価値判断力を高める要因は様々である。それは，他者との出あいや友だちとの話し合い，教師の投げかけなどによる。以下に，２人の子どもの事例を紹介したい。

①　様々な方法で情報を収集する子どもの姿

N児は，第一次提案で「電車の中に携帯電話を使ってはいけない車両をつくる」と考えた。そのきっかけは，教師がこの問題を投げかけた新聞記事に，関西地方での取り組みが書かれていたからである。その後，関西地方でのその取り組みをインターネットで調べていたN児には気になることがあった。それは，初めは電源OFF車両が２両だったのに，最近になって１両になってしまったことだ。しかし，ネットではわからなかったので，教師の勧めで，阪急電鉄に電話で問い合わせてみた。電源OFF車両はなかなか徹底されず，相変わらず車両で携帯電話を使用している人はいるが，阪急電鉄は諦めずに取り組んでいるということであった。できることから少しずつでも取り組むことの重要性を感じたN児は，東京ではまだ電源OFF車両がないので，関西の取り組みの事例を根拠に，この提案への思いを強くした。今回，ネットや電話などでできるだけ詳しい資料を収集しようとする点はN児が伸びたところである。しかし，他の鉄道会社と比較してこの取り組みの効果をさらに検証するという，一歩踏み込んだ提案までには至らなかった。子どもたちには，情報を選択し，情報の信憑性を評価するまで力をつけていく必要性を感じた。

② 他者の視点をもとうとすることができた子どもの姿

Y児は，第一次提案では「国が法律を作って厳しくする」という考えであった。自分の意見を裏付ける資料として教師からの投げかけで千代田区のたばこ条例を調べることにした。そして，たばこ条例を敷いた後には路上たばこが1/10まで減った事実をつかんだ。そのことからも強制的に取り締まることの大切さをより感じたようだ。さらに，他の立場からの提案でも，強制的に進める意見が多かったため，益々自分の考えを強めた。その後教師がペースメーカーをつけている人の投書記事を紹介したところ，Y児の考えに変化が起きた。法律で罰することよりも，一人ひとりの努力や配慮を大切にしようとすることが，この問題の解決には大事だと感じたのである。ペースメーカー使用者という問題の当事者の立場（他者の視点）の声を聴くことが，子どもの考え方に大きな変化を起こしたのである。子どもの価値観を揺さぶる教師の役割の重要性を強く感じた。

(4) 社会的価値判断力の高まりから社会参加へ……

一人ひとりが思いやりの心をもって，自分から取り組む大切さを主張し続ける子どもたちもいた。しかし，学級全体としては，強制的にやっていくべきだという考え方が圧倒的に多かった。そこで，教師が異なる立場からの視点を与え，揺さぶりをかけた。ペースメーカーをつけた人の投書記事をきっかけに，「強制的にやることも必要であるが，一人ひとりが思いやりをもって取り組むほうが社会としてはよい」と考えを変える者が多かった。一人ひとりが自分からマナーを守ろうとする社会のほうがよいと感じた結果となった。子どもたちが自分のことばで「社会を見る３つの目」の見方・考え方を語った瞬間であった。学習の終末を迎える頃から，子どもたちが「多くの人々にわかってもらいたい」という気

もちをもち始めたのでみんなに伝えやすい方法を話し合い，関係諸機関にお願いし，ポスターを貼らせてもらったり，子どもたちが駅長さんに案を伝えたりした。また，本大学構内でも，大学生や教職員にチラシを配り，優先席付近で携帯電話を使わないことをアピールした。この問題に真剣に向き合ったからこそ，子どもたちは社会に対して何らかの働きかけをしたいと願い，子どもたち自らが社会に飛び出したのである。社会的価値判断力という「リテラシー」をじっくり育てることが，自然と「社会参加」という結果を生み出したのである。子どもが願った時に行う「社会参加」を，今後もめざしたい。

4　公開研究会での授業提案や協議会検討を経て

(1)　部会として授業改善のために目指したことやそのための手だて

①社会的な論争問題や，子どもたちの生活に身近な新たな題材（場面設定）を工夫した。

②社会的価値判断力・意思決定力の高まりをどのように評価するかという課題に対して，「価値判断や意思決定の学習過程」それぞれの段階に，「評価する観点」を洗い出し，実践とその評価する観点をつなぎながら，授業をふり返ろうと始めている。

(2)　具体的な問題点

子どもの姿から

○根拠となる資料収集に前向きになってきたが，資料の信憑性を評価する力はこれからつけたい。

教師の手だてから

○自分とつながったと感じた社会事象についてはよく考えるので，身近な題材を増やしたい。

○優先順位や選択の根拠を問う論理的思考力を伸ばす題材や設定場面例を開発したい。

○議論することに向く題材と，反対に，共感的に認識を広げる題材と，その順序や構成を検討したい。

○「公共性」を育むために，市民が担う「リテラシー」を更に明らかにして，『学びの概要』（「シティズンシップ教育」版）を作成したい。

(3)　協議会での話題・意見・質問など

①場面設定型の授業について

場面設定に対する子どもたちの問題意識をより高めるためには，問題設定の前までにどのような学びを子どもたちにさせなければならないのか，深く考える必要がある。

②子どもたちの話し合いに実態がともなっていない　ことについて

場面設定に対する子どもたちの考えに実感がともなっていないように感じたという意見があった。そう感じさせてしまう理由の一つにインターネットでの調べ学習や，子どもたちの体験不足，地域との関わり方の不足があげられる。そのことは，克服すべき課題であるが，「市民」では，資料に基づいて客観的に判断することに重点を置いている。

③子どもたちの意見の絡み合いについて

論点をどう絞って，小さな観点に落とし込んで絡み合わせていくかは大事である。

④価値判断の落としどころは一つなのか？

「一つに決めなくて良い。独りよがりの判断から，私としてはこのような判断・・・というように変わっていけばよい。生き方を決めるときの，いろいろな価値があってよい。」という考え方だけでは「市民」にはならないと考えている

⑤「社会を見る３つの目」の「個人」の定義について

「社会を構成する個人」と「法人や団体の中の個人」のそれら２つを並列においてよいのか，今後検討することが大事。

⑥「シティズンシップ教育」を単なる規範教育にしないことが大事。価値判断が自分自身の行動を律するための規範みたいなものにならないほうがよい。

(4)　協議会を経て今後の課題であると認識したこと）

①題材や場面設定例のあり方については，より吟味していきたい。

②規範教育にとどまらない，各学習分野から迫れる「シティズンシップ教育」のあり方について，研究を進めていきたい。特に市民では，社会に関わる問題についてさらに取り上げたい。

③協議会では，論点を絞って建設的な話し合いをめざしたいが，なかなかうまく運べない。今後，協議会の進め方は，指導助言者から提示する論点も事前に検討して，研究していきたい。